

カフカの『流刑地にて』

吉 野 英 俊

(1)

1912年から1914年にかけてカフカが取組んでいたのは「罰」の問題である。『判決』（1912年9月）から『変身』（1912年11月）を経て、この『流刑地』（1914年10月）に至る一連の作品と、『流刑地』執筆のため一時中断していた『審判』（1914年8月から年末）など、カフカのこの問題に対する執着は並外れている。また上記の文学作品以外にも『日記』に散見する罰に関する記述は少なくない。そこで特徴的なことは、カフカにとって罰は避けるべきもの、忌むべきものではなく、むしろ肯定的なもの、歓迎すべきものと考えられているということである。すでに1910年には『……く目に見えない審判よ、お前が来ればなあ』という祈りの言葉を、ぼくは絶えず耳にしている。』とある。そのおよそ一年後には『審判』の結末を思わせる次のような記述がある。『今朝、久し振りにまた、ぼくの心臓のなかをぐるぐる回っているナイフを空想して楽しんだ。』と。さらに時は下るが1921年には『罰が迫りつつあり、ぼくがそれを非常に気楽に、確信に満ち、楽しく歓迎するということのうちにこそ、幸福があった。……』と書きしるされている。このような罰の肯定的な性格は、『流刑地』では犯人に変容をもたらす処刑装置によって幾分かは見えてとれるが、上述の他の諸作品からそれを見てとることはほとんどできないであろう。しかも

この『流刑地』においてさえ、結局、犯人の処刑は中断され、その身代わりに自己処刑を実行した将校も変容に至ることはなかったのである。奇妙なことに文学作品における罰と、『日記』における罰は性格を異にしている。それはおそらく虚構世界と生身のカフカの肉声の相異に由来しているのであろう。つまり、虚構世界の主人公たちは罰の何たるかを洞察していない立場にあるように設定されているためである。

『流刑地』は『判決』『変身』『審判』と比べられると、何処か毛色の違うといった印象を受けられると思われる。それは、他の三作品が都会を舞台にしているのに対し、この物語は流刑地という極めて特殊な舞台を背景にしていることや、また（おそらくは処刑を受けることなく物語の最後まで生き残る視察旅行者という人物の登場によって）描写の強度の客観性が感じられること、さらにこの物語は作者の伝記的事実から完全に独立し、純粋な文学作品へと昇華されていることなどに起因するのであろう。にもかかわらず、『流刑地』だけがこれらの作品群からひとつとびぬけているのではないことは、カフカ自身の証言⁽²⁾を待つまでもなく、推測されうる。これらの作品には、物語背景の閉鎖性や裁く者と裁かれる者という対立する二つの世界といった構造上の共通性が見出されるからである。

また『流刑地』には以上のようなそれ以前の作品との共通性ばかりでなく、それ以後のかなり多数の作品の萌芽もすでに含まれている。三原弟平氏はそのことからこの作品を「十字路のような作品⁽³⁾」と呼んでおり、具体的に『審判』『断食芸人』『ジャッカルとアラブ人』『田舎医者』『城』との類縁性を指摘しているが、それ以外にも例えば将校の死顔、つまり死後もなお生前と変わらぬ確信に満ちた表情は、生と死の境を永遠に漂う『獵師グラッフス』を想起させるし、またそれを通してしか罪人が変容に達しえない装置は『グラッフス』の天の門や『掟の門』の門と同一の機能を有している。さらに旧司令官の掟がその死後も生き残っている事情は、『皇帝の倫旨』と同じ事情であることも付け加えられよう。カフカの諸作品は相互に関連しあっており、そのためカフカ文学の全体をまず俯瞰することが必要なことは言うまでもないが、この意味で『流

刑地』はひとつの鍵となる重要な作品であると思われる。

(2)

物語は「これは、独特な装置なのです」(E199) という将校の言葉で始められる。この独特な装置、つまり「罰は人間を変容に導くという物語の根本思想を目に見える事象に変えた」⁽⁴⁾装置こそが、この物語の原点なのである。流刑地という血なまぐさい舞台は、カフカによって案出された処刑装置という形象によって決定されている。物語の細部の形象はすべてこの原点に由来している。ある不可視的なものを可視的なものに変えることによって、カフカはこの物語を成立させているわけだが、そのような好例は他に『変身』が挙げられよう。ある平凡なセールスマンの突然の変身、この構想こそが『変身』という物語の出発点であり、そのすべてなのである。このような構想は読者にショックを与えずにはおかない。そして読者を日常的な思考法から脱却するよう要求する。ちなみに、『審判』における「目に見えない裁判所」という構想は、これの裏返しであるように思われる。本来、可視的な裁判所を不可視的なものへ変えることによって読者の内に同じショックを生じさせることができるのである。

熱帯の島である流刑地という背景は、以上のことから、この世の何処にも存在しない場所であることが分ろう。Binder は「お粥」(Reisbrei) や「茶屋」(Teehaus) や「臭気ぶんぶんたる魚」(von stinkenden Fischen) や「ヨーロッパのある大学者」(ein großer Forscher des Abendlandes) などの語句から、この流刑地の舞台は中国であることを指摘しているが、それは副次的な事柄であるにすぎない。カフカの物語の背景の多くが、この世の何処にも存在しないことは、彼が書くことを「内面生活の描写」と言っていることから理解されよう。おそらくカフカ文学の背景の無名性と閉鎖性はこの「内面生活の描写」と無関係ではないだろう。『判決』の父の暗い裏部屋、『変身』のザムザ家、あるいは『審判』のヨーゼフ・Kの住む名もない町という背景も、その閉鎖性という点ではこの『流刑地』の背景に少なくとも劣ることはないのである。

(3)

物語の中心には処刑装置がある。この装置の興廃をめぐって二人の主要人物が対立している。即ち、旅行者と将校である。一見すると対立しているのは新司令官と将校であって、物語はそのどちらにも組しない中立の報告者である旅行者の立場から語られているように思われるかもしれない。というのは、旅行者はヨーロッパ出身の外国人として設定されており、しかも当初は装置にほとんど関心を示していないことから、客観的な観察者とみなすにふさわしいからである。Honegger は彼を「物語る報告者」⁽⁶⁾と呼んでいる。物語はたしかに旅行者が見たり、聞いたり、考えたりしたことを描写することによって成立している。旅行者の内面は地の文で表わされるが、彼以外の諸人物の内面はたいてい彼の推量という形や引用符付きの直接話法で語られている。語り手の視点は旅行者が担い、そこから決して外れることがないように見える。だが、Henel はこれとは別な興味深い見方をしている。この物語の語り手に関する彼女の記述は次のようである。「たいていの解釈者は、『流刑地』は旅行者の位置から物語られていると主張している。しかし、それは物語のいくつかの部分に、とりわけ装置の崩壊に関する報告と将校の死にあてはまるにすぎない。もっと本質的な部分、即ち、物語の開始以前にあり、装置に関する一切のことは、将校によって直接話法で述べられる。にもかかわらず、この部分は *perspektivisch* に物語られているなどと言うことはできない。というのも、将校は流刑地に対立しているのではなく、その一部だからである。その上、彼が報告し、処刑方法の擁護のために持ち出す全てのことは、聞き手である旅行者によって正にこのやり方を非難するための証明と受け取られる。語り手は従って旅行者の位置にも将校のそれにも立っていない。⁽⁷⁾……」

Henel は中立の語り手の存在を認めている。つとに知られているように、『判決』の最後の一センテンスと『変身』の最後の五頁には主人公が死に、視点を担う人物を失ったあとの語り手の存在が認められる。⁽⁸⁾『流刑地』でも語り手の介入は少なくとも二ヶ所で認められる。ひとつは「……旅行者はいままでに

ずいぶんいろいろと経験を重ねており、こんな場合にも考えがぐらつくことはない、誠実で、恐れを知らない人物であった。……」(E 226) という箇所であり、もうひとつは語り手が犯人の内面に介入した例である。「……自分に起ったことが今度は将校に起っている。今度は最後の最後までいくだろう。あの外国の旅行者が命令を下したにちがいない。すなわちこれは復讐である。自分の苦しみは途中でおしまいになったが、かわりに将校が徹底的な復讐を受けるのだ。」(E 231)

この二ヶ所はなるほど視点のちょっとした破綻と言えるかもしれぬ（だがそう言うにはこの二ヶ所は重要な意味を持っているのではないだろうか。読者に旅行者という人物が信頼するに足ることを保証する点で、また自分の考えというものをそもそも持っているかどうかとも疑わしい、愚かな犯人の内面を抉り出している点で。）だが、語り手の存在を示すには十分であろう。

旅行者と将校は対等の資格で対立しているのであり、彼らの背後には中立の語り手が認められるのである。当初、処刑に無関心であった旅行者は、後で述べるように、次第に関心を示し始め、遂には旧制度の崩壊の原因となる重大な判断を下す役割を割合てられるのである。彼は実は観察者であるのではなく、たとえそうなることを望んでいないにせよ事の当事者であることがやがて露見する。

ここで興味深く思い出されるのは『田舎の婚礼準備』の中の八折判ノート・八冊中、第二のノートにある記述である。そこでは「私の二つの手が闘いを始め……私を審判員に任命する。……ところが私は格別な理由もなく右手をかわいがっている。……左手の敗北は必死と思われ、私が仲裁に入ろうとするが……二つの手は重なりあって倒れ、右手は左手の背中をさすっており、私は公平な審判らしくもなく、それを見てうなづいて⁽⁹⁾いる」

(4)

この流刑地ではこれまでに数知れぬ人々が処刑されてきた。今は山積みとなっている観客用の藤椅子が往事をしのぼせるし、将校はかつて谷間を埋めつく

した見物人の様子を語ってきかせる。旅行者が立ち合うのはその一例にすぎない。犯人は「上官暴行罪」(E199)を犯したのである。起訴手続は「まったく簡単明瞭」(E207)で、大尉の報告に基づいて、将校が即刻「判決を下し」「逮捕した」のである。というのも、将校の判決の原則は「罪とは常に論議を容れる余地のないもの」(E206)であるからである。そして驚くべきことには、ここでは罪の如何を問わず、常に同じ罰、即ち死刑が用意されている。おそらく「上官暴行罪」の内容を詳しく詮索する必要はないだろう。ただそれは馬鹿げた、滑稽な罪であるということさえ確認しておけば、それで十分だろう。事実、将校も「事件はごくありふれたものです」(E207)と言っている。しかも、この処刑は将校にとって、処刑制度の興廃を賭けて旅行者を味方につけるという重要な意味を持つものであるのだが、それにしてからがこの罪なのだ。このことから推測できることは、罪は罰の理由ではないということであり、誰もが罪を負っており、従って罰を受けてその罪を贖わねばならないということである。ここでは罪と罰が逆転している。罪の確定から罰にいたるのではなく、何人も自分の罪を知りえないので(犯人には判決が知らされないのだ)刑の執行(罰)そのものが犯人を罪の認識へ、と同時に救済へと導くのである。このような罪に関して Emrich は「犯罪と彼(被告)が犯した罪とは同一視されねばならない。被告は自分の罪と一致せざるをえないのである。罪と存在は同一なのである⁽¹⁰⁾」と言っている。つまり彼の言う罪とは「いっさいの個々の犯罪の源である自らの現存在の罪」なのである。Henel も同様に、罪は常に疑いのないことから、この罪を「人間存在と共に与えられた罪、有限性の烙印、ある種の原罪⁽¹¹⁾」と述べている。

(5)

流刑地の処刑制度は、全能の神ともまごうべき旧司令官によって立案、導入されたものであり、彼の亡き今はその忠実なる信奉者、将校によってかろうじて維持されている。旧司令官は「兵士であり、裁判官、建設者であり、化学者、設計者」(E205)であった。これは Honegger によれば正に全能の神のし

(12)
るしである。そしてすでに死んでいるが故に、人間の手の届かぬ神さながらの「不可侵性」を有していおり、彼の墓碑銘には「幾星霜ノ後必ズヤ閣下ハ復活セラレ……」(E236)とある。将校は前の閣下から受け継いだ図案を扱う際には、まるで聖なる物を扱うかのように(Henelは「Schrift」を「heilige Schrift」と関連づけている)何度も手を洗い、それを「私のいちばんたいせつなもの」(E210)と言う。その文字は将校だけが読むことができ、彼以外の誰も読むことはできない。人がこの文字を読むにはある手順を必要とする。つまり処刑装置にかけられねばならないのである。この文字は目では読めず、自分の肉体に刻み込まれた傷で判読せねばならないのである。

犯人は装置にかけられることによってのみ、罪の認識に、贖罪に達することができる。将校による装置の説明は(『変身』の毒虫の描写と同様に)微に入り細に入っている。(これはカフカの仕掛けたトリックだ。)犯人の身体に耙の針が文字を刻み込んでいくのであるが、それには烈しい苦痛を伴う十二時間を要するというのである。「二時間後にはわめき立てる力もなくなり」「六時間目には犯人に静かな状態がおとずれ」「あとは六時間をかけて自分の傷で文字の意味を解く仕事が残されている」(E212)という。このような拷問とも言える手続を経る理由は、「文字の意味は眼では理解しえない」からであり、判決が犯人に告げられない理由は、「身体に書いてあればわかる」からである。一見、残虐で、非合理で、前近代的とも映るこの処刑にもそれなりの論理はあるのである。耙は「人体に型どってあり」「頭部には小型のノミだけが用いられる」(208)これは Henel によれば「掟は大腦や理性によって理解されるのではなく、全存在によって理解される」ことの示唆なのである。また、十二時間にも及ぶ処刑に嗜虐性を見ることはなるほど可能かも知れぬが、これも Henel によれば「処刑方法の残忍さや処刑の機械化を表すべきものでなく、処刑という任務の困難さを表わしている」ということになる。つまり自分の全存在でもって罪を認識するという贖罪の難しさの表現なのである。

判読が終わり、犯人が息絶えると、「耙が男を串刺しにして、穴の中へほうりこむ」そして「将校と兵隊がそれを埋める」。(E212) 手筈になっている。自

分の罪を認識するという後半の六時間の仕事に比して、埋葬は実にそっけなく行われる。来世への期待といったものはここでは微塵も感じられない。ただ罪を認識することの重要性だけがきわだっている。

ここでの裁判手続と処刑方法は、今日の我々から見れば、到底受け入れがたいと思われるであろう。この今日の時代の我々の立場を旅行者が代表している。旅行者は「被告には弁明の機会も与えられず」「自分の判決も知らされず」「刑の執行すら告げられない」裁判手続と、さらには十二時間に及ぶ、拷問とも呼べる処刑方法の説明を聞いて、「処置の不合理なこと、処刑の非人道的なこと、これは議論の余地がない」(E214)と思うからである。一方、将校にとっては同一の事柄が「……最も人間らしくまた人間にふさわしい方法」(E221)なのである。両者の対立は止揚不可能なのである。

(6)

『流刑地』の犯人と好対照をなしているのは『審判』のヨーゼフ・Kの場合である。彼はもっぱら自分の理性に頼って罪を考えようとするばかりなので、いっこうに裁判所の法律を理解することができない。丁度、判決の文字は眼では理解されないのと同様に。裁判所は(親切にも)あの手この手を使ってKに罪を認識させようとするが、それは繰返し徒労に終わる。審理では彼は自己の無実を主張するばかりだ。だが、ある時彼は廷丁の後に従って裁判所事務局に足を踏み入れるが、この時に『流刑地』の処刑装置の機能とよく似た現象が彼の身に生じる。彼はそこで気分が悪くなり、自分の身体を支えることもできなくなり、やっとのことで案内係に外へ連れ出してもらうのだが、もしここで彼がこの生理的な悪感に持ちこたえたとするならば(この悪感は処刑の最初の六時間の苦痛に相当すると思われる)『流刑地』の犯人同様に「変容」(Verklärung)に到達したかもしれないのだ。そのことはテキストの中でも読みとれる。「…次の瞬間、Kの身にはなにか大きな変化(Verwandlung)が起こるにちがいない、それを見のがさずにおくものか、といった様子なのだ」(p. 61)⁽¹⁴⁾

捉あるいは罪を認識するには、どうも苦痛を経ることが必要らしい。苦痛に

は自己を放棄させる力がある。自己を放棄して初めて、人はある別な領域へ入ることが許されるらしい。『流刑地』の犯人は強制的に装置にかけられる⁽¹⁵⁾。ヨーゼフ・Kはといえば、自由意志に任されているので、彼の行為はことごとく罪の認識に逆行する。彼はあらゆる人に援助を求めるが、それは自己の無実を証明しようとする目的のためなのだ。これが将校の言う「いたずらな混乱」(E207)なのだろうか。将校は言う「……もしはじめに男を召喚してあとで尋問する、というようなことをすれば、いたずらに混乱をまねくばかりでしたらう。相手は嘘をつく、反駁されて、また新しい嘘を考え出す、いつまでたってもはてしがたい……」(E207) ヨーゼフ・Kの訴訟は理論的にはもっと続きえたはずである。それにピリオドが打たれるのは「一年間の訴訟」で彼自身が何かを感じ取ったからである。(それが何であるかは明確には語られない。というのもカフカの文学世界では罪人が罪を認識することはできないからである。)最終章の冒頭でKは「黒の服」を着て、「新しい手袋」をはめて、死刑執行吏を待っている。そして二人の執行吏と奇妙な三位一体を形成しながらこうつぶやいている。「……一年間の訴訟でさえ、なんらこのおれに教えるところがなかったということを、今ここで示さねばならないのだろうか？ものわकारの鈍い人間として消え去らなければならないのだろうか？訴訟のはじめには、それを終えようとのぞみ、今その大詰になって、訴訟をまたはじめようとしているなどと、かげ口を言われてもいいものだろうか？こんなことは言わせたくない……」(p. 192)

(7)

物語の中で実際に登場するのは、旅行者、将校、兵隊、犯人の四人だけで、他の重要な二人の人物、即ち新旧司令官は将校の話の中にのぼるだけである。従ってこの両者の実在性は四人に比べると薄いと言えよう。我々は先に旧司令官の神的な特徴に触れたが、新旧司令官は「人物」というよりも、二つの「時代精神」といったものを、あるいはヨーロッパと非ヨーロッパという二つの「異文化」を表わしているように思われる。そしてその代表者が旅行者と将校なの

である。カフカが描く世界は実在よりも関係の世界のようだ。熱帯の流刑地という、なじみのない場所に、誰一人として個有名をもたない登場人物（彼らの役割がそのまま彼らの名前なのだ）。彼らが演じる役割と、連帯したり敵対しあったりする相互の関係ばかりがきわだっている。

旧司令官は自ら処刑に参加した。彼自身の手で犯人が装置に横たえられた様子を将校は語っている。一方、新司令官は処刑には関心を示さず、「港湾建設」(E224)に大わらわである。つまり前者は犯人を変容に導くという超越的な仕事に携わり、流刑地の閉鎖性を守ろうとしているが、他方、後者は実際的な仕事を行い、超越的な仕事は時代の流れに委ね（だからこそ彼は処刑の是非の判定を旅行者に任せているのだろう）、港湾建設に力を傾注することによって流刑地を開かれた場にしようと努めている。このように、新旧司令官の時間的な隔りは物語の中ではわづかに一世代であるが、その本質上の相異は絶対的なのである。

ところで、旧司令官の精神世界を信奉していることを公言してはばからぬ最後の男、将校は新司令官の方針に非常な危機感を抱いている。おそらくは新司令官の治世下で装置を維持していくための苦勞によって、彼は「非常に疲労して」(E200)はいるが、今なお祖国を表す「軍服」(E200)を着込んでいる。これほどまでに彼の旧秩序に対する信仰は確固たるものがある。

将校は装置を献身的に整備、調整し、旅行者に向かってそれを熱狂的に説明する。それに対して、旅行者はといえば「装置にはほとんど興味がなく、眼に見えて無関心な態度で」(E199)あり、両者のやりとりは、当初、空転しているかのような印象を我々に与える。だが物語の進行に伴い、両者の確執は次第に歯車がかみあってくる。旅行者は「装置にたいしていくらか興味を感じはじめ、手をかざして太陽をよけながら、装置のそばに立ち、仰いで見て」(E203)いる。その後、将校の誠実な説得とそのゆるぎない信仰とによって、旅行者は彼の行動に理解を示し、「……自分の支持する処刑方法が……廃棄されようとするいま、将校のこの態度は、まったく正しい、かりに旅行者がかれの立場にあったとしても、これ以外の行動はとれなかったはずだ」(E230)と感情移入を

示しさえする。なるほど旧制度は旅行者の言うように「もう崩壊しかけている」(E222) のかもしれぬが、「旅行者の、かれ自身としてはむしろ義務を感じてした行動が、おそらく動機となって」(E230) 最終的な崩壊へ導かれるのである。旅行者はここにいたって完全に問題にからめとられている。

ここで、神のような絶対的な権力を持つ旧司令官の精神世界の信奉者である将校が、当地の処刑制度にうとく、しかも外国人である一旅行者に助力を乞うのは不可解であるという疑問が生じるかもしれぬが、我々はこの疑問に深入りはしない。というのも、逆に旅行者の方も不本意ながら（彼は再三この制度に反対する自分の資格を疑っている）この制度の判定者の役割を押しつけられてしまうのである。この両者の出会いにはあらゆる論理を超えた運命的なものが感じられはしないだろうか。この二人には見解の相違を越えて、信頼関係がある。互いに相手の言葉の真実さを疑わないのである。旅行者は、将校の死顔に変容が生じなかったのを見た時でさえ、「これまでの処刑においても変容が生じたことはなかったのだ」などと疑うことをしないのである。⁽¹⁶⁾

(8)

「それはできません」(E226) という旅行者の返答は将校の内面にどんな作用を及ぼしたのだろうか。それは彼に自己処刑を決断させるほどの力を持っていたはずなのだが、彼の外面にはほとんど何の変化も生じないように見える。彼は「二、三度眼をばちばちさせたが、やはり旅行者を見つめたまま」(E226) であり、返答の理由を説明する旅行者の「話が耳に入っている様子もなく」「かすかなほほえみを浮べる」だけである。だが、将校の決断は次の瞬間に素早くなされる。彼は犯人を釈放すると、自己処刑の準備にとりかかる。裁かれる者である犯人と裁き手である将校の、この突然の逆転に読者は呆気にとられる。それは『判決』で父に代わって店を切盛りしていた息子が、それまで毫碌しきっていたが突然力を得た父の判決を受け、それに従う時の素早さを思い出させる。

何故、将校は犯人を釈放してしまうのか。というのは犯人の処刑を貫徹し、

彼の変容する有様を旅行者に見せることこそ、旧制度を理解してもらう最後の、そして最善の手段であったと思われるからである。事実、将校自身こう語っている。「……十分に説明を聞いていただき、機械も見ていただきました。そして、いよいよ刑の執行をごらんに入れるところまでこぎつけました。御判断はもはや確固たるものがあると信じます。多少の疑念がおりでも、それは、実際をごらんになれば、跡方もなく消えてしまうでしょう。……」(E222) 彼は精一杯の自信を旅行者に見せつける。この制度を維持するための綿密な計画さえ打ちあける。だが旅行者の判断は将校の話でぐらつくことはなかった。今や旅行者が裁き手で、将校が裁かれる者という事態になったのだ。将校はおそらく、裁かれる者は今処刑されかけている犯人ではなく、自分自身であることを悟ったのではあるまいか。

彼は犯人の処刑を中断した。この時にはすでに彼の覚悟はついていた。「いよいよ、時間が来ました」(E227) という言葉にその覚悟は読み取れる。彼にとって処刑に対する旅行者の判断はそのまま彼自身に対する判断を意味していたのである。というのも、処刑とは「人間は罰によって救済される」という将校の理念そのものだったからである。

新司令官はもはや処刑に関心を示さず、同志は一人また一人と減っていく。将校にとっては巻返しの最後の可能性を持っていた人物も否定的な判断を下した。彼は流刑地にあって孤立してしまったのである。先に将校の自己処刑の決断の素早さからゲオルクの死を想起したが、それも理由のないことではない。ゲオルクの死と将校の死はほとんど同じ状況下で生じたのである。ゲオルクの死についてカフカはこう言っている。「……つまりゲオルクは何も所有していないのだ。……共有のものはすべて父の周りに積みあげられ……そして彼自身はもはや父へ向けた視線以外何も所有していないので、ただそのために彼から父を完全に切り離す判決が、そんなに強力に彼に作用するのである。」(T217)

将校は自己処刑の直前に「にわかに眼をぎらぎらさせて、旅行者の顔を見るが、それは「協力を求め協力を呼びかけている眼の色」(E227) なのである。この「協力」とはおそらく裁き手となった旅行者に最後までこの処刑に立

ち合い、自分の変容を見とどけてほしいという気持ではないかと推測される。今まさに幽明境を異にしようとする将校があとに残る旅行者に求める協力とは、これ以外には考えられないだろう。

(9)

将校が果たして変容を期待していたのかどうかということは、テキストの中ではほのめかされもしない。音もなく動き出した装置はやがて図案箱内部の歯車を一枚残らず押し出してしまい、拷問の過程はひどく短縮され、犠牲者の額には「大きな鉄針の尖端がずぶりと突きささって」(E234) 処刑は終わる。将校には変容は生じなかった。彼の死顔は「生きていたときのままの顔であり…唇を固く閉じ、眼は開いたまま、生きていたときの感じをたたえていた。安らかに確信に満ちた視線」(E234) であった。

にもかかわらず将校は変容を期待していたと思われる。その理由の一つはすでに述べた「協力を求め協力を呼びかけている眼の色」である。次いで、将校には自己処刑前の不安、恐怖の徴候が少しも見られないからである。変容の期待が彼から死の不安、恐怖を取り除いたのである。最後の理由は、将校は処刑の手順を正式に踏んでいるからである。つまり、彼は従来の処刑と同様に、旧司令官の紙挟みの中から図案を選び出し、それを図案箱に入れ、自ら全裸にな⁽¹⁷⁾って装置に横たわっているのである。ここには何ひとつとして欠けているものはない。

それでは一体どうして他の人々に起こったという変容が彼には生じなかったのか。この問題は装置の崩壊と切り離せない関係にある。従ってまず先に何故装置はこわれてしまうのかという問題から見ていきたい。

装置の崩壊は将校の意志によるのだろうか。というのは、この装置のメカニズムに精通しているのは将校をおいて他にいないからである。彼は自己処刑の直前に歯車の配列を組み変えている。そうすることによって彼は意図的に装置を破壊しようとしたという可能性もないわけではない。だが、彼が変容を願っていたことをもう一度思い出そう。彼が変容を願望していた以上、この可能性

はまずないと考えられる。歯車の配列を変えたのは図案箱に入れる図案が変わったためと考えるのが妥当だろう。

すると装置は将校の意図に反してこわれてしまったのだ。だが、この場合にも様々な原因が考えられよう。Honegger は例として二つの理由を挙げている。(1)機械の崩壊は、その最後の信奉者、擁護者としての将校の自己有罪宣告が機械の存在資格の取消しを意味していることから理解される。将校がこの世の生活を敵対的な世界で断念したのと同様に、処刑装置も自ら自分を破壊したのである。というのはその時代も過ぎ去り、それは将来もはや何の任務にも仕えることができないからである。Honegger によるもうひとつの理由は、(2)機械はそれに課された任務のせいでこわれたというものである。将校は無実の者としての自己に対して、罪ある者のために創られた機械による処刑を要求したことによって、いわば機械に過大な要求をしたのである。⁽¹⁸⁾

第一の理由は理論的には正しい。何故ならすでに見たように処刑に対する旅行者の判断はそのまま将校自身に対する判断であったことから分るように、装置と将校は一体だからである。だが将校は変容のない死を望んだのではない。そうである以上、装置も正常に作動することを期待されているのである。従ってこの理由は装置崩壊の理由にはなりえないのではあるまいか。

第二の理由に関しては、Henel は否定的な見方をしている。Henel は Honegger の第二の理由とよく似た Sokel の理由「将校は自分とある非合理的な体系の具現である機械とを破壊するが、それは彼が合理的で道徳的な掟『正シクアレ』に転換することによってである」を、将校はこの掟を、それに基づいて罪人が処刑されるべき他の掟と同様に司令官の紙挟みから取り出していることによって退けている。⁽¹⁹⁾

Henel によれば「機械はそれには不慣れな、より人間的な正義という掟によってではなく、ある新種の罰、即ち、将校は掟を知っており、すでに彼が機械に身を横たえる時には自分の判決を知っているという罰によってこわれる」のである。つまり装置の本来の機能は罪人の知らない罪を十二時間かけて認識させ、それによって変容に導くことにあったのであるが、将校が自分の罪を知っ

ている以上、装置はもはやただ処刑を、殺人をするだけなのである。将校が変容を望み、処刑手続をきちんと経たにもかかわらず変容できなかった理由はここにある。

将校の自己処刑は現代の処刑にほかならない。現代の処刑は罪人が不必要に苦しむことを許さない。拷問の過程は短縮され、太い鉄針が瞬時に将校の生命を奪ったのである。将校が装置に身を横たえた時、装置の機能は一変したのである。それは現代の処刑装置の機能を帯びる。おそらくは将校を裁いたのは旅行者、我々の時代の代表者であったためであろう。

しかし、将校の死と装置の崩壊は旧秩序の一方的敗北を意味しているのではない。旅行者を旧司令官が埋葬されている「喫茶店」へ導くのは「過去の力」にほかならないからである。彼は「歴史的な回想のにおいが漂う」喫茶店で「過去の力といったものに打たれ」(E 235)、テーブルの下にあった旧司令官の墓碑銘を「ひざまずいて」(E 236)読むのである。その墓碑銘通りに旧司令官が復活するかどうかは定かではないが、少なくとも一人で島を立ち去る旅行者の胸の内にはまだ旧司令官の精神世界が未解決の問題として重くのしかかっているように思われる。

(1983年11月3日)

引用は E: Kafka, Franz: Erzählungen, S. Fischer 1967 その他はすべて Fischer Taschenbuch Verlag, Ungekürzte Ausgabe 1976 による。

略号は T: Tagebücher, P: Prozeß, H: Hochzeitsvorbereitungen auf dem Lande である。

尚, „In der Strafkolonie“ 本文の訳は、以前からなじんでいた関係上、角川文庫『ある流刑地の話』本野亨一訳より借用させていただきました。

(注)

- (1) Henel, I.: Kafkas In der Strafkolonie. Form, Sinn und Stellung der Erzählung im Gesamtwerk, in: Untersuchungen zur Literatur als Geschichte, Erich Schmidt, Berlin, 1973, S. 496 f. ヘネルはここで、罰のテーマをもつ三つの作品、即ち、『判決』『変身』『流刑地』が、カフカの『(作品

の中で) 世界を純粋なもの、真実なもの、不変的なものに高める』(T534) という目標に沿って発展していることを確認している。

- (2) Kafka, F.: Briefe S. 134

カフカはその出版人クルト・ヴォルフ宛ての書簡の中で、『判決』『変身』『流刑地』をひとつの短篇集『罰』にまとめて出版したい旨を伝えている。

- (3) 三原弟平 『流刑地』について 『ドイツ文学論集』1977 25頁~26頁

- (4) Henel, I.: a. a. O., S. 482

- (5) Binder, H.: Kafka-Kommentar zu sämtlichen Erzählungen, München 1975, S. 174 ff.

- (6) Honegger, J. B.: Das Phänomen der Angst bei Franz Kafka, Erich Schmidt, Berlin 1975, S. 233

- (7) Henel, I.: a. a. O., S. 483

- (8) Beissner, F.: Der Erzähler Franz Kafka. Stuttgart, 1952

- (9) Kafka, F.: Hochzeitsvorbereitungen auf dem Lande, S. 50

- (10) Emrich, W.: Franz Kafka, Athenäum, Frankfurt am Main, 1970, S. 221 f.

- (11) Henel, I.: a. a. O., S. 485

- (12) Honegger, J. B.: a. a. O., S. 234

- (13) 拙稿、『カフカの「考察」と『審判』』(明治大学教養論集, 第158号, 61頁)

- (14) 拙稿, 前掲書, 59頁。

- (15) Henel, I.: a. a. O., S. 488

「認識は苦痛によって可能にされ、それ自体苦痛であると同時に慰めでもある。苦痛は生が必然的に伴う苦痛として理解されうるが、それが人間に認識と慰めを、即ち、救いをもたらすときには、人間はそれのある罪——自分が知らないある罪——に対する罰として受け入れねばならない。しかしそうする準備は人間にはない。だから彼は強制的に罰に服させられねばならないのだ。これが『流刑地』における罰の意味である。」

- (16) Henel, I.: a. a. O., S. 484

- (17) 拙稿, 前掲書, 69頁

全裸で装置に横たわることとは八折判ノート中の〈至聖書にはいる前に……一切のものを脱ぎすてねばならない……〉(H. 77) を思い出させる。

- (18) Honegger, J. B.: a. a. O., S. 240

- (19) Henel, I.: a. a. O., S. 491

Kafkas „In der Strafkolonie“

Hidetoshi Yoshino

Die Erzählung „In der Strafkolonie“ verdankt dem Bild, „Hinrichtungsapparat“ alles. „Der Apparat setzt den Grundgedanken der Erzählung, daß die Strafe den Menschen zur Verklärung führt, in einen sichtbaren Vorgang um.“ (Henel, I., S. 482) Das bestimmt bis ins Detail die Bilder der Erzählung, so wie das Ungeziefer in „Die Verwandlung.“

Es scheint, als ob die Erzählung vom Standpunkt des Reisenden erzählt würde. Aber in Wirklichkeit stehen sich der Reisende und der Offizier gleichwertig gegenüber und hinter ihnen ist der neutrale Erzähler erkennbar. Denn der Reisende, der zunächst als einfacher Betrachter der Hinrichtung erscheint, interessiert sich allmählich immer stärker für den Apparat und schließlich wird er als Beteiligter an dieser Sache entdeckt. Außerdem können wir wenigstens auf zwei Stellen (E. 226 und 231) hinweisen, wo die Perspektive von seinem Standpunkt ablenkt wird.

Das Schema, daß sich der neutrale Erzähler hinter beiden Hauptfiguren versteckt, erinnert uns eine Schilderung Kafkas im zweiten Oktavheft: „Meine zwei Hände begannen einen Kampf.....Mir salutierten sie und ernannten mich zum Schiedsrichter.....“

Hier in der Strafkolonie „entscheidet der Offizier nach dem Grundsatz: Die Schuld ist immer zweifellos.“ (E. 206) Und doch ist es erstaunlich, daß für den Verurteilten immer dieselbe Strafe vorgesehen ist: die Todesstrafe. Gleich, ob dessen Vergehen geringer oder schwerer ist. Deshalb sind alle Menschen hier schuldig und müssen durch Strafe, genauer gesagt, durch eine vom Apparat verhängte Strafe büßen. So können wir hier eine gewisse Erbsünde erkennen.

Der Apparat tötet den Schuldigen nicht sogleich, sondern die Egge, ein Teil des Apparats, schreibt langsam zwölf Stunden lang auf seinen ganzen Körper die Schrift des alten Kommandanten. Und am Ende der Hinrichtung versteht er durch seine eigene Wunde deren Sinn. Erst dann gelangt er zur Erkenntnis seiner Schuld und wird dadurch erlöst.

Dem Reisenden gefällt ein solches Strafverfahren nicht, weil er die sanftmütigeren, humaneren Ansicht unserer Zeit oder Europas vertritt. Dagegen vertritt der Offizier die der alten Zeit oder Anti-Europas. Und er versucht mit aller Kraft den Reisenden für sich zu gewinnen, um die alte Ordnung wiederzuerrichten.

Der Leser fühlt sich bei der Begegnung der beiden in eine fatalistische Lage versetzt.

Kaum gibt ihm der Reisende die Antwort „Nein.“, läßt der Offizier, den Verurteilten frei und entschließt sich, sich an seiner Stelle in den Apparat zu legen. Warum? Weil „er das Urteil gegen das Strafverfahren sofort als Urteil auch gegen sich selber auffaßt.“ (Henel S. 491) Nun sieht er ein, daß der Reisende zu seinem Richter geworden ist und gleichzeitig der Gerichtete nicht mehr jener einfältige Mann, sondern er selber ist.

Erhoffte sich der Offizier Verklärung, als er sich in den Apparat legte? Diese Frage klingt nicht an. Wir können aber trotzdem glauben, daß er sich sie erhoffte. Der erste Grund dafür sind seine Augen kurz vor der Selbsthinrichtung. „Er blickte plötzlich *mit hellen Augen, die irgendeine Aufforderung, irgendeinen Aufruf zur Beteiligung enthielten*, den Reisenden an.“ (E. 227) Der zweite Grund ist, daß er angesichts seines Todes weder Angst hat noch davor flieht. Und der letzte Grund ist, daß er vorschriftsmäßig verfährt. Er entnimmt die Gesetzesschrift, wie bisher, der Mappe des alten Kommandanten, steckt sie in den Zeichner und legt sich nackt in den Apparat.

Aber die Verklärung wurde ihm nicht zuteil. Sein Tod ohne Verklärung und der Zusammenbruch des Apparats sind untrennbar miteinander verbunden. Im Augenblick, wo der Reisende, der Vertreter unserer Zeit, zum Richter des Offiziers geworden ist, ändert auch der Apparat seine ursprüngliche Funktion. Er kann jetzt nichts anderes als ein Apparat unserer Zeit sein. Der Hinrichtungsprozeß des Offiziers wird sehr verkürzt, denn unsere Zeit will nicht, daß der Verurteilte unnötig leidet.